法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

〈論文〉「竹」のイメージ : 横笛の巻の素材について

大野, 妙子 / オオノ, タエコ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
59
(開始ページ / Start Page)
19
(終了ページ / End Page)
26
(発行年 / Year)
1999-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020040

「竹」のイメージ
――横笛の巻の素材について――

大野　妙子

〈一〉

光源氏は密通により誕生した薫を心から受容しようと言葉に出し表したのは、薫の誕生後一年以上たってからである。横笛の巻に次の様に吐露されている。(傍点は大野・以下同じ)

うきふし忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける（横笛四―351）[1]

歌を詠みかけた相手は幼児薫であり、返歌などは期待すべくもない。言葉に出されていても響いていくのは、光源氏自身の内奥にであった。密通のことは忘れられないがとそのことにこだわりながらも、こは棄てられないというように、幼児薫を受容していこうとする心情が吐露されている。この心情流出の裏側には、過去から現在に到るまでの光源氏の薫に対しての心のありようが、遡って表されていることにもなる。「こは棄てがたき」の言葉の内には、棄てる可能性もあったという今迄隠されていた思いがあらわにされつつ、だからこそ一層強く「棄てがたきものにぞありける」と強め、今まさにありありと自己自身の深々とした心情の内に、棄てられないのだということが確認されているのである。この光源氏の独詠的な歌は[2]、それ迄の幼児薫に対する揺れる思いから、受容への転換をもたらす。さらに横笛の巻を貫くひとつの仕組みがそこに敷設されてもいる。つまりこの受容への転換点の歌による創出には、そこに到る迄の場をつくりあげる表現を支えていた素材を、言葉によってとらえ直し、新たな表現世界へと、意味を拉致していこうとする意図があるように見えるからである。

幼児薫に対する、いやとりわけ横笛の巻における意味、表現における転換は次の様になっている。

御歯の生ひ出づるに食ひ当てむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば、「いとねぢけたる色ごのみかな」とて、

うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける（四―351）

これは「たかうな」[3]を「つと握り持ち食ひ濡らし」ている薫のあり様を見ての光源氏の独詠であり、「くれ竹のこ」に「たかうな」をひびかせ「こ・此」に「子」を重ねている。「たかうな」は散文や歌集の詞書には使われるが、歌語とならず、歌になる時には「くれ竹」とか「竹」と言い換えられる。たとえば次の様に。

たかうなほるところ
土わくるには来て見ればくれ竹のこもれる春のよともしられず（中務集65）[4]

この様な約束に従っての表現により、「たかうな」をかじり親近する薫が、「くれ竹のこ」と言い換えられることによって、とらえ直されていく。その時、厭わしいことは忘れられないが、この子は棄てることができないという意味性と同時に、「たかうな」という表現性の持つ材質感、即物性とは異質の「くれ竹のこ」という素材になり変わり、その表現の即物性の象徴するものが転換されていく。それでは「たかうな」「くれ竹」はこの横笛の巻においてどの様な意味、象徴性を担っているのだろうか。

ここで横笛の巻の構成をみておこう。

柏木の一周忌がめぐってきて、山の帝から女三の宮への贈り物と贈歌の歌が、光源氏によって見られる。さらに山里からの「野老」と「筍」の贈り物の「筍」をかじる幼児薫の姿が生き生きと描き出され、光源氏の感慨へとつながれていく。そして夕霧と落葉の宮とのかかわりを描きながら、柏木の笛が御息所から夕霧へ渡される。その夜の夕霧の夢に柏木が立ち現われて、笛の伝えられるべき人が異ると言う。そのことにより夕霧は六条院の光源氏のもとへ行き、夢の話を伝えると共に、そこに秘められていることを知りたいと思う。が光源氏は柏木の笛を、自分の方で受けとっておかなければならないものだと断定的な口調で言う。こうして柏木の笛は夕霧を経て光源氏へと受容されることになった。この様にこの巻の中心にあるものは、幼児薫と「筍」、そして柏木の笛にかかわること。その事が非常に印象的に置かれているのである。これを横笛の巻における構成素材と仮に言うと、「筍」「笛竹」[5]であり、それを括くるのは〈竹〉という素材である。つまりこの巻は〈竹〉にかかわる何らかのイメージが、創作主体へ刺激を与えたのではないかということがみえてくる。しかもそれは「筍」と「くれ竹のこ」「笛竹」という〈竹〉の連想により、転換されつつ連繋されていることによって、表現、意味性を拡大させていくという仕組みになっている。しかしそれはあくまでも原初的に作者を刺激している働きの段階と限定しておく必要があるだろう。

〈二〉

「筍」は出家し山の寺に居る朱雀院「山の帝」から、娘の女三の宮を気づかう贈り物として、「野老」と共にもたらされる。

御寺のかたはら近き林にぬき出でたる筍、そのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてあはれなれば奉れたまふ（四―346）

この様に「筍」と「野老」は、「御寺」の近くの「山里」の風情あるものとして対応されて物語の場へ提出されている。「筍」については『河海抄』[6]で引かれているように、亭子院宇多法皇が延長六年に、醍醐天皇の中宮穏子に贈った例もあり、また「野老」は作者と同時代の人のものに、

十二月ばかり、雪のいみじう降りたるに野老のあるを親がりやるとて

君がため求めたるかな雪降ればそこどころとも見えぬ山

路に（「和泉式部続集」1257）[7]

があり、それぞれ山里からのものとして贈られていたものであることがわかる。ここで特色のあるのは「筍」と「野老」の二つの素材を持ち込み、それぞれの場の虚構形成に機能させていることである。この現実の生活の場と地続きの素材を、特に「山里につけてあはれなれば」と、その「御寺」近くの「山里」であることを強調する。六条院の場に「御寺」近くの「山里」的なる物を持ち込み、「野老」の素材によって「山の帝」と女三の宮の心の交流を描く。「野老」を媒介にした贈答歌には、しかしその素材としての即物性は消し去られて、ただ語のひびきとしてだけ残される。贈歌と答歌だけをとりあげてみる。

世をわかれ入りなむ道はおくるとも同じところを君もたづねよ（四―347）

この「山の帝」の歌に女三の宮は

うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ（四―348）

と応じる。出家した自分と「同じところ」を求めるようにという父に、「うき世にはあらぬところのゆかしくて」と響鳴している心情が吐露されている。「野老」は語の響だけに残され、その即物性は溶解されることで、父と娘の心の空間として選びとられた観念世界の共有が果されている。この二人のやりとりを光源氏は見て「いとほし」と父の心に同情しながらも、女三の宮に対して「あらぬ所」をもとめると、単に六条院を出ていく事として「心憂し」として日常の言葉でしか応じ得ない。つまり「野老」を契機としながら、歌という機能によりその即物性を溶解させながら、さらに日常の言葉との乖離を利用する。そうすることによって、向き合う父と娘と、そこに入り込めず置き去りにされる光源氏の孤立した心のたたづまいが表わされることになる。そのことで、女三の宮を出家に追い込んだのは自分のいたらなさではなかったのか「などかうはなりにしことぞと罪得ぬべく」（四―348）という自己の内省へ向けられる。

わざわざ二つの素材を持ち込むことの意味は、それぞれに寺近くの山里からの物であることを強く込めることにより、その素材に意味を含ませ、現実と地続きではない物語の場を仮構しているのであるが、「筍」はどうであろうか。父と娘の心の融合を仮構するものとして「野老」が「山の帝」と女三の宮と組み合わされていた。「筍＝たかうな」は幼児薫とだけ組み合わされている。幼児薫と「筍」のことに注目した論[8]はあるが、素材の一貫性という視点とはちがっている。

〈三〉

さて「筍＝たかうな」の登場である。物語の場への「筍」の提出というのは、「野老」の提出と同様のレベルのものであったのだろうか。山のものと言えば、『宇津物語』の「俊蔭」のなかで、母と仲忠の山で生活していた時の食べ物を思い出す。そこでは「野老」は出てくるが、「筍」はない。また『竹取物語』の中に「竹」という表現は出ているが「筍」はない。しかし前に触れた様に、現実の生活の場では山のものとして、贈られたりしているのである。この様に現実の場と物語の場とのズレがあ

る。その物語の場へ「筍」を提出したことは、作者にとって意味あることであったはずだ。物語の場への新たな素材の提出である。だからこそすでに物語という場の、山のものとして周知の「野老」と共に、「筍」はそっと「山の帝」から贈られてくる必要があったのだ。「筍＝たかうな」という物語にとっての新たな素材は、光源氏がはじめて心情から「こは棄てがたきものにぞありける」と歌の表現により、言葉に出し吐露する場面をつくる契機となっている。さらにここには二様に象徴的に負わされている意味がある。ひとつは「筍」をかじる幼児薫を「いとねぢけたる色ごのみかな」と光源氏が、変った色ごのみだと冗談[9]を言いながら、薫を「くれ竹のこは棄てがたき」と心情的に受容することを、象徴的に意味し描く場面性への機能としてである。もうひとつは「筍」に近づくことは、寺近くの山里からもたらされた「筍」であることにより、薫が「筍」に親近していくのは「寺」近くの「山里」を志向するという性情を象徴するものとして意図されていることである。しかしその性情は、物語の中の人物たち、光源氏にもつかみとれないように描かれている。だから幼児薫のあり様が「いとあはただしう取り散らし」「筍をつと握り持ち」と動的に描き出され、そのあり様は「不気味[10]」というよりも、その性情と共に心情から受けとめる者のないまま、ひとり孤独な不安定さをつくり出すものになっているのである。薫にとって真の生存の場を求め得ない不安としてのものなのである。つまりこの幼児薫の性情には、場面に潜在されつつさらに、横笛の巻からもはみ出していく意味性が、意図的に込められていると言えるのではないか。この性情は後の宇治十帖における薫の登場のさせ方にひびきあっているのである。

幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなう思ひわたれど、問ふべき人もなし。（中略）「いかなりけることにかは、何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りごたれたまひける（匂兵部卿五—23）

と、その出生に疑問を持ち不安な思いを抱くありようとして、また宇治の山里に住む

俗ながら聖になりたまふ心の掟いかに（橋姫五—128）

対面して見たてまつらばやと思ふ心ぞ深くなりぬ（五—130）

と、都よりも山里へ、俗聖と言われている宇治の八の宮へと心引かれる薫の性情。つまり横笛の巻において、後の宇治十帖の構想がどれ程練られていたのかはわからないが、少くとも幼児薫の性情を、この様にその深層に潜ませていることのうちには、おおまかではあるが宇治十帖の主人公としての薫のイメージは、作者の想像のうちにあったと考えてよいだろう。それにしても素材としての「筍」を物語の場へ出すために、「山の帝」からの娘を気づかう父の心情として、「野老」に添わせる様に工夫して持ち込んできた。さらに「筍」をかじる幼児薫と組み合わせることによって、そのつくり出す象徴的な意味性を、場面への機能と、さらにそこを突出していく機能を負わせるという、二重の仕掛けをしているのは、山里の「筍」をかじるという素材の組み合わせに込めた強い関心のあったことを思わせる。作

者の時代の和歌集や、『千載佳句』『和漢朗詠集』にもない、「筍」を食うという素材。ただ気になるのは、『白楽天詩集』の巻七「間適、三」[11]に「食筍」「筍を食ふ」という題の詩がみられたことである。すぐに結びつけて考えているわけではないが、素材発見ということでは気になることである。

〈四〉

「筍」がこの様に使われたあと、「たかうな」に親近する幼児薫との組み合わせは、薫を「くれ竹」「竹のこ」と歌語によってつかみ直し、次の意図へと機能させていく。

うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける

月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし（四―351）

この歌の引歌は周知のことであり、修辞上のことは前に触れたので先に進める。ここで注目する必要のあるのは、「この君」という表現が出されてくることと、「ゆゆしきまで生ひまさり」という表現が置かれていることである。「この君」のかわいらしく、不安になる程までに美しく成長しまさっていくことが、「うきふし」を皆忘れさせてしまいそうであると言う。光源氏の「うきふしも忘れずながら」と、そのことは忘れられないのだが、この子は棄てられないという、幼児薫に対しての心からの受容が独詠歌に吐露された。しかしそこではまだ密通のこと「うきふし」は「忘れず」と心の内にわだかまっていた。それなのに「この君」と言われ、「ゆゆしく生ひまさり」と連なり表現されてくる文脈の流れは、「忘れぬべし」という内容に変化していくのである。つまりここでは、「たかうな」をかじる幼児薫が「くれ竹のこ」と、歌の言葉に依って言い換えられて、この言い換えは「筍＝たかうな」と「くれ竹」をつないでいく役目もしているし、〈竹〉という素材での一貫性を保つことにもなっているのである。が、さらにそれが「この君」と表現し直されているのである。この言い換え、とらえ直しに関わって、「生ひまさり」が出されて、「忘れぬべし」という表現性はせり出し得ているのである。あの厭わしいことを忘れさせてしまう程に、「この君」という語、さらに「ゆゆしく生ひまさり」の表現の持つインパクトは大きいようである。いったい「くれ竹」から「この君」へのとらえ換えのうちには、表現内容を変質するだけのどの様なものがあるのだろうか。実は「くれ竹」を「この君」と、とらえ直して言うのは、この作者の独自のものではなかったようだ。すでに『枕草子』のあの清少納言が得意そうに書いている。

五月の頃のこと、月のない夜に、「中将」「新中将」「六位」[12]の蔵人たちが、定子の御前にやって来て、「女房や候ひたまふ」と口々に言うので、清少納言が出てみるように言われたので、

「こは誰そ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」と言ふに、物も言はで簾をもたげて、そよろとさし入るるは、呉竹の枝なりけり。「おい。この君にこそ」と言ひたるを聞きて、「いざや。これ殿上に行きて語らむ。」（『枕草子』「五月ばかりに」）

男性貴族たちは名のらずに、ただ「呉竹の枝」を差し入れた。

その時すぐに「この君」と言ったことに対して、男たちが驚嘆して、話題にしようと「殿上」に去って行き、またやって来る。その時には

「この君と称す」といふ詩を誦して（同）

と、今度は詩句を吟誦しながらやって来たという。この様に、「呉竹の枝」を「この君」と言うことは、男性貴族たちにとって周知の漢詩文の教養によるものであること。そしてそれを踏まえて、女房、とりわけ清少納言の教養を試めしたことがわかる。「呉竹の枝」を御簾を持ち上げて差し入れた男たちの挑発とともによせる期待を、はずすことなく「この君」とすばやく応じたわけである。この詩句はすでにこの様に、遊戯的な材料に提供される程までに熟知されていたということがわかる。その漢詩文の本文は『本朝文粋』に、『和漢朗詠集』巻下の「竹」の項目に詩句の一部がとられている。

晋の騎兵参軍王子猷　栽ゑて此の君と称す

唐の太子の賓客白楽天　愛して吾が友と為す　篤茂[13]

この様に、『枕草子』や『源氏物語』の作者の時代よりも前の、十世紀半ば頃の漢詩人のものだが、共有されて詩句をめぐっての知的な戯れの場をつくっている。ここでは「呉竹の枝」を「栽ゑて此の君と称す」という詩句によって受けとめたことへの賞讃で、それ以上に触発されていくことにはならなかったようだ。『源氏物語』の作者にとっても、時代の共有する感覚をこの横笛の巻において、常套的に用いているわけである。「くれ竹」を「この君」へと言い換えるという遊びに乗りながら、さらに詩句に込められた「栽ゑて此の君と称す」という表現に触発されて、場面の状況を押し開いている。詩句の、植えた竹が気に入りのめり込んでいく心情をとらえる。それを、「この君」と幼児薫をとらえ、言い換えて表現しなおすことによって、そこに愛情をこめて受けとめていく光源氏の心を重ねてみる。そのために「この君」という表現性が「忘れずながら」というこだわりの心情を、「忘れぬべし」へと飛躍していく心のありさまを描く場面としてつくり出し得ている。

〈五〉

「この君」の成長ぶりを「ゆゆしきまで生ひまさり」とあらわしているそのことは、さらに場面をもこえてゆく。不安になる程までにかわいらしく成長しまさっていくということには、〝だんだん美しく成長〟するという間延びしたものではなく、それをみているものが、不安になる程に成長しまさっていく。その漲り、勢いが込められているのである。この表現が先の「この君」に連奏されて「忘れぬべし」を引き出すものとして働いてもいる。さらにここには、場面性を抜けて広がっていくことの可能な素材を、密かにしのばせてもいるとみることができる。「くれ竹」を「この君」とみて〈竹〉に親近する思いを表出するものとはまた異り、その成長に、さらに成長の果を注目し、表出したものとして表現に潜在させていることに注目する必要がある。次の様な詩句を重ねてみることができるのではないか。引詩句が「この君」の様にここにあるわけではないのだが。

迸笋いまだ鳴鳳の管を抽でず

盤根纔かに臥龍の文を点ぜり

この詩句は『和漢朗詠集』の巻下の「竹」の項にあるので、当時の文人たちの好みの秀句のひとつでもあったのだろう。この詩句のことは『江談抄』第四[15]に、その作成された背景が説明されている。七言絶句の起句と承句が『和漢朗詠集』(大野書き入れ)にとられていること。さらにこの漢詩の成立は「そのころ(天暦二年)作られたものと考えられる。」と結論されている。「清涼殿が新造された天暦二年ごろに再び(呉竹が)植えられたのであろうか。」と、この詩文成立の背景のことが言われている。清涼殿が新造されたことと共に、当時の文人たちの記憶にあったのだろう。以上の様なことからみても、この『源氏物語』の作者が何らかの機会に、この詩句を知ったと考えてもよいだろう。ぴったりと詩句と重ねられ、目に見える断章的な引詩として現われていないが、「ゆゆしく生ひまさり」の表現が、「思し忘れ」ることへ連動していく表現の転換をつくり出すために、作者の想念にはこの詩句が要請された。しかしそれは「この君」という表現のうちに抱括されてもいる。つまりここでは詩句は、作者の想念の内にだけあり、次の展開を呼び込むものとして意図されてもいるということである。「ゆゆしきまで生ひまさり」と、幼児薫を見る人々にとって、不安な程にまで生いまさっていくととらえられる有様は、同時に「筍」をかじる幼児薫、「くれ竹のこ」「この君」としてとらえ換えられてきた。その事に連想され、幼児薫自体が「迸笋」と、とらえられて、さらにその成長していく様は「鳴鳳の管」として意識されているのである。ここを表現の深部で動かしているのは、「生ひまさり」という、成長するに従いますます素晴らしくなっていくということが、「迸笋」勢いよく伸びていく筍もまだ笛の管を作るほどではない。という「迸笋」の表現の持つ律動感につき動かされるように、「思し忘れ」るという心情の転換として引き出されてきていることになる。つまりそこにあるのは、作者における内的必然性なのである。それは表層では「思し忘れ」るということを表わす場面に帰納していきながら、さらにこの場面性をつき抜けてゆく意図をこめたのである。「迸笋いまだ鳴鳳の管を抽でず」の詩句のうちには、「筍」が〈笛〉になっていくことが逆接的に出されているのであり、「筍」をかじる幼児薫は「くれ竹のこ」「この君」と言い換えられながら、ここで「筍」と〈笛〉が結びつけられたわけである。こうしておいて以後、横笛の巻に柏木の笛を登場させることになる。この柏木の笛は単に「笛」としてではなく、そこに薫をも象徴的に表すものとして、作者の想念のうちにあったのだ。それは密かに後の物語の準備のために果されていたと言える。この巻の最後に到って、夕霧を媒介にして光源氏に柏木の笛が受けとられる時に、「その笛はここに見るべきゆゑある物なり」(四—367)と、決然として「笛」を受容する。それは独詠歌で心情吐露し、さらに「笛」という即物的なものの受容により、しっかりと幼児薫を光源氏が受けとめたことになる。幼児薫の受容は、公的には三度の産養[16]が描かれることにより果される。さらに心情からの受容を独詠歌により描く。そしてまた「笛」であることと同時に、幼児薫の象徴でもある「笛」による受容ということが、物語にとって必要なこととして作者に思われているのであった。そこに作者のみているものは、主

人公の物語における座の譲り渡しということではないのか。横笛の巻において、血縁のつながりではない新たなつながりを、物語の主人公において創ろうとしたことのひとつに、笛の相伝[17]が意識され、柏木、薫、光源氏をつなぐ工夫がされる。そこにこの詩句が刺激を与えたのではないか。そこに見たものは「笛」が「笛」になるということで、薫と柏木の笛が結びつき、その笛を光源氏が受けとる。この様な原初的な見取り図の上に、さらに「笛」をかじる薫、笛の持つ意味性[18]を附与していったのではないか。だから最後に光源氏が決然として受け取ったことを描くことには、二重の意味が込められることになる。それは読み手に知られる表層の意味と、作者の想念の内に後の物語展開を意図しつつ込められている深層の意味である。

具体的な「笛」が光源氏に受け取られることにより、やがてそれが光源氏の手から薫に譲られていくことが予想される。ということのうちには、「笛」が薫の象徴であることによって、今迄の物語の主人公、光源氏の座が薫へと譲り渡されていくことの意味が内包されているとみる必要があろう。横笛の巻は「笛」[19]をかじる幼児薫と、柏木の笛とはそれぞれに論じ分けられているが、素材への原初的な接近としては緊密に結びあわされて、作者の意図のうちにあったと言える。そしてそれは光源氏の独詠歌の場面の流れのうちに、凝縮されて込められていたわけである。さらに同時代の文人（人々に）たちに、もはや遊戯的に弄ばれる程に熟知されていた詩句の遊び方に、寄り添いつつ、密かに自己の知識をそっと差し出し、創造への営みを楽しんでいたのではないか。

〈注〉

(1) 本文の引用はすべて『新編日本古典文学全集』小学館による。

(2) 薫に言いかけているが実質的には答歌を期待していないものとしてあるので、独詠歌としてとらえる。以下同じ

(3) 本文では「笛」だが説明との関わりで「たかうな」と記す場合がある。

(4) 『新編国歌大観』「中務集」適宜、仮名を漢字に変えた。

(5) 夕霧の夢に現われた柏木の歌にある表現。「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ」（四—360）

(6) 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店）

(7) 『和泉式部続集』（角川文庫）。歌の前後関係をみるものではないので使用。

(8) 松井健児「『源氏物語』の小児と笛」（『源氏物語研究1』翰林書房）

(9) 高橋亨『色ごのみの文学と王権』（新典社）や(8)はここを光源氏の冗談ととらずに「色ごのみ」の語に注目し、そこに藤壺と光源氏の関係を当てはめたり、柏木の執拗な女三の宮恋慕のあり方を当てはめて読もうとしている。私はその読み方はとらない。「色ごのみ」の語ではなくて「笛」の語に意味をみる。

(10) (8)に同じ

(11) 『続国訳漢文大成』「白楽天詩集」巻七

(12) 『日本古典文学全集』（小学館）「枕草子」

(13) 『新潮日本古典集成』「和漢朗詠集」

(14) (13)に同じ

(15) 江談抄研究会『類聚本系江談抄注解』以下の説明はそれによる。

(16) 柏木の巻に、「御産屋の儀式」（四—299）に続き、三日、五日、七日の帝からのことなどが描かれている。

(17) 浅尾広良「柏木遺愛の笛とその相承」（『源氏物語I』若草書房）小嶋菜温子「柏木の笛」（『源氏物語批評』）など。

(18) (17)に同じ。

(19) (7)(17)など。

（おおの　たえこ・通教部講師）